

34 肺炎に伴う心不全、腎不全の増悪に対して腹膜透析が奏効した高齢患者の一例

JA 長野厚生連佐久総合病院腎臓内科¹⁾ ○村上 稷¹⁾ 池添正哉¹⁾ 佐田竜一¹⁾ 樋端恵美子¹⁾
山崎 諭¹⁾ 山口 博¹⁾

【症例】78歳、男性。平成10年に僧帽弁閉鎖不全症、心房細動、三尖弁閉鎖不全症に対して僧帽弁輪形成術およびMaze手術、三尖弁輪形成術を施行された。しかし、その後も徐々に弁膜症は進行し、慢性腎不全を合併していた。平成18年11月3日、肺炎に伴う心不全、腎不全の急性増悪のため入院となった。肺炎に対してCTR_X およびAZMの投与を開始し、心不全に対しては十分な利尿が得られなかったためカテコラミン投与下でECUMを施行した。しかし、11月7日に肺炎の増悪のため急変し、気管内挿管されICU入室となった。抗生剤をMEPMとTEICに変更し、心不全および腎不全の増悪に対しては血液透析を試みた。

しかし、カテコラミン投与下でも血圧が60台まで低下したため血液透析を断念し、ICU入室4日目にCAPDカテーテル挿入術を施行した。術後3日目より腹膜透析を開始したところ血圧低下をきたすことなく除水が得られ心不全は改善、それに伴い肺炎も治癒した。

【考察】心不全と腎不全の既往があり、肺炎を契機に急性増悪した症例である。血液透析が困難な心不全、腎不全、肺炎を有する高齢患者に対して、腹膜透析を導入したことにより良好な結果が得られた。本症例のように感染症を合併した急性期においても腹膜透析が有効な手段となりうる可能性がある。